

2015 年 9 月 27 日 「神様とお父様の心情の相続」 石川祐司教会長

本日は、U・ONE TV の視聴と石川教会長の説教でした。以下に訓読のみ言を掲載いたします。

<訓読のみ言>

『天聖經』

第三篇 真の愛 第三章 真の愛の実践

第三節 真の父母の真の愛

獄中生活と真の愛の訓練

24 今まで先生は、獄中でも生活をした人です。今まで数度にわたって監獄生活をしましたが、その獄中生活が先生にとって悲しみとはなりませんでした。そこは、先生には二つとない最高の道場でした。人間を本当に愛することができるか、怨讐を本当に愛することができるか、死刑囚と鼻と鼻を突き合わせ、同じ空気を吸うことができるかということを考える道場でした。そして、そのような場で、この民族の恨を感じ、情熱をもって社会の不正を辛辣に批判できるかということを考える良い道場だったのです。そこから私たちの教会は出発しました。そのような場でも、人間が備えなければならない基準、神様が提示した人格的基準を喪失することなく、どれほど困難な環境でも克服できる一つの源泉的な実体をどのように收拾するかということを、今まで必勝の生活哲学としてきたのです。

25 獄中の受難の中で、むちを受けて血を吐く拷問を受けながらも、先生は、むち打つ怨讐を恨みませんでした。真の神様は、御自身が最も愛する息子を犠牲にしても怨讐を救いたいと思われ、それだけでなく、最も貴い記念品までもその怨讐に与える方です。これが正に神様の愛です。むち打つ怨讐のために、涙を流して祈らなければならないのが神様の道理です。それで、先生は、今までそのようなことをしてきました。

26 先生は、二十四歳から監獄生活をしました。拷問を受けて鼻が折れ、頭が割れ、首が折れるような場でも、鉄石のような信念をもち、この国に対して絶対に屈服しなかった男です。「いくらでも棍棒で打ってみよ。私の体が壊れるのではなく、棍棒が壊れるだろう。指を切ってみよ。どんなひどい拷問をしても屈服はしない」と考えながら耐えた男です。心情の骨髓に宿った事情、その誰もが解くことができない事情を抱えた立場に、涙のにじんだ父の愛が込められていることを知りました。いまだに人が知らない深い谷間で、ひっくり返さなければならない峠道が残っているのです。

27 先生が、先生が監獄にいる時、母親が訪ねてきましたが、そのまま帰しました。先生は、そのようにしなければなりませんでした。先生は、先生の兄弟に決して会いませんでした。先生は、兄弟、家庭、親戚を犠牲にして新しい人々を探そうとし、先生の父母、兄弟、また親戚を愛した以上に、皆さんをもっと愛してきたのです。神様がそのような方だからです。神様は、その息子を犠牲にして全世界を救おうとされました。神様は、ひとり子の生命まで

犠牲にしなければなりませんでした。そのようにしてでも、全世界を救援しようとされました。先生もそのような手本に従わなければならなかったのです。